

## 第9回協働実践研究会報告

2015年9月5日(土)、チュラーロンコーン大学 MCSビル401/18号室で第9回協働実践研究会が開催されました。今回は58名の参加者がありました。タイ国内に加え、日本、そして台湾からの参加がありました。

研究会では、最初にチュラーロンコーン大学との共催で公開講演がありました。講演では、協働の学びの場として教室活動をデザインするさいに、何をめざすかによって、デザインが変わるとともに、教師の役割も変わってくる話が話されました。

13:10~14:10 <<講演>>

・協働の学びの場のデザインと教師の役割

館岡洋子 (早稲田大学)



つづいて、実践報告を中心とする10のポスター発表があり、活発な意見交換・情報共有が行なわれました。



14:10～15:10 << ポスター発表 >>

- ・「基礎日本語ライティング授業におけるピア・レスポンス活動の試み」  
スニーラット・ニャンジャロンスック, ナナコーン由喜恵(タマサート大学)
- ・「プロジェクト型学習における協働から高校生は何を学ぶのか—「タイ国際日本語キャンプ 2015」の実践を通して—」  
中尾有岐(国際交流基金バンコク日本文化センター)
- ・「日本語学習者のエントリーシート作成における発達のワークリサーチの試み」  
古賀万紀子(早稲田大学院生)
- ・「簿記日本語の実践におけるピア・ラーニングの効果」  
水崎泰蔵(スラナリー工科大学)
- ・「現実としての「協働・共同」から概念としての「協働」へ—タイにおける質的な研究調査から見てきた教師間協働の可能性—」  
中山英治(大阪産業大学)
- ・「読み手を意識して内容を推敲すること」を目指した作文授業の実践報告」  
桃井菜奈恵, 山口 優希子(タマサート大学)
- ・「協働学習の会話の授業における教師の介入のタイミングとその度合い——チューラーロンコーン大学日本語講座 2 年生の会話の授業について」  
今井己知子(チューラーロンコーン大学)
- ・「留学生の進路選択につながる省察的対話: 書くことによる学びを考えるために」  
広瀬和佳子(神田外語大学)
- ・「ピア・レスポンスにおける学習者の役割について」  
吉陽(筑波大学大学院)
- ・「日本語教師間のロールレタリングの実践—協働による教師研修デザインを目指して—」  
小浦方理恵(麗澤大学), 鈴木寿子(早稲田大学), 唐澤麻里(文化外国語専門学校)

最後に、「なぜ協働するのか」というテーマでのラウンドテーブルでは、3つの事例報告がありました。その後、事例ごとにラウンドテーブルのセッションが持たれ、参加者と情報提供者による意見交換、議論が行なわれました。各ラウンドテーブルの報告は、以下の通りです。

- ・「なぜ協働するのか—ピア・リーディング活動は受動的な学習者を自律的な学習者へと変えることができるか」スニーラット・ニャンジャロンスック (タマサート大学)



本ラウンドテーブルでは、ピア・リーディング活動において、予習をしない学習者への対応について意見交換が行われました。学習者が予習をしないこと背景には、他の科目の課題が多いことほかに、テキストの難易度やテーマに対する興味の低さなどが指摘されました。読むことへの動機を高めるための工夫として、読みやすい

ものから難しいものへとテキストの難易度を調整することや読み物のジャンルを増やすことなどが挙げられました。また、グループ活動が好きなタイ人の学生に対して、ピアでの学び合いが起こるような工夫が必要であるという点も共有されました。グループ活動において評価の観点が見られることや、ピアでの学びの意義が実感できるような導入活動を用意することなどの意見が出されました。報告者：金孝卿

・「なぜ協働するのか—タイの大学生の協働に対する意識」松井夏津記・池谷清美（チュラーロンコーン大学）



本ラウンドテーブルでは、タイの大学生の協働に対する意識調査を基に、どのような学習内容が協働に向いているのかという観点から議論が行われました。教室活動による違いはなく、これからの教育には協働が不可欠だという意見や、一人ではできないような課題や考える過程を共有する活動に向いているのではないかなど、現場での経験に基づくさまざまな

意見が出されました。また、発題者の実践では、学生の反応が肯定的ではなかったと報告された教室活動が、ラウンドテーブル参加者の実践では異なる反応が見られたことが分かり、実践の全体像を共有する必要性が改めて認識されました。活動の目的や内容は似ていても、学習環境や教師の教育観、それに伴う教育アプローチによって結果は大きく異なるので、実践者のあいだで、どのように実践を伝え合い、その意義を共有するかが今後の課題であると思われました。報告者：広瀬和佳子

・「なぜ協働するのか—実践フィールドへの反省から 21 世紀日本語人材育成という学習目標に向けて—」羅 曉勤（銘傳大学）・荒井智子（銘傳大学）・張 瑜珊（大葉大学）



本ラウンドテーブルでは、第一に、台湾の日本語教育におけるルーブリックを活用した実践をめぐる議論が展開されました。ルーブリックを使って学生が相互評価する、ルーブリックそのものを学生が協働で作成するなど、ルーブリックをツールとした協働学習の可能性について確認しました。第二に、こうした協働学習

で培われた協働力は、21 世紀日本語人材育成につながるのか、企業や社会は批判的な思考を含む協働力を本当に求めているのか、などの問題提起がなされました。21 世紀日本語人材育成には協働力は不可欠であることを確認した上で、第三に、教師は学生に21 世紀日本語人材として協働力を身につけてほしいと期待している一方、学生は成績などの短期的視野で学習に臨む傾向にあることが課題として挙げられました。学生に対して「なぜ協働なのか」をしっかりと説明すること、やがて学生が社会に出てから（あるいは出る直前に）協働力の重要性を認識することもあるため、学生を信じ、協働実践を信じる重要なことを最後に確認しました。報告者：トンプソン美恵子